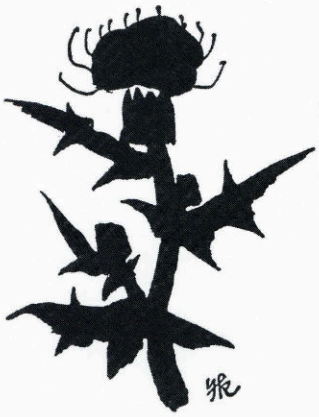
# 美術館からのメッセージ

## ～画家として、一人の人間としての香月泰男とは～

ようやく町立香月美術館の姿が見えだしてきました。後は仕上げに入るばかりですが、もうしばらくは（6月中旬頃まで）かかりそうです。

画家香月泰男先生の著書の中に一人の人間として、戦争、シベリヤ抑留体験のある画家として、絵を描くことへのこだわりがどのようにあり、作品一つひとつの中にどのような思いがあって、なぜこのように沢山の作品が生まれたのでしょうか。そして時が過ぎ去って行くにつれ香月芸術に根強い人気があるのはなぜなのか町民の皆様とともに広報を通じて探求できればと思います。

また、ライフスタイルの変革の進む中で「文化意識の向上」の必要性と美術館とのかかわり合い方について考えてみるのも、これからは大切な事なのでは……。



**著書「私のシベリヤ」の後記より**

今こうして仕事場で思うことは、

戦争を体験することがなかったなら、単調に一生を費して了うことになっていただろう。

私の一生のど真中にそのことがあったために、私が私になり得ようとするのに役立つ。

だが体験したとは言っても、私のそれは多分に傍観者のように思えてならぬ。年月の流れがそう思わせるのか私が絵を描く人間であったから――か――と。

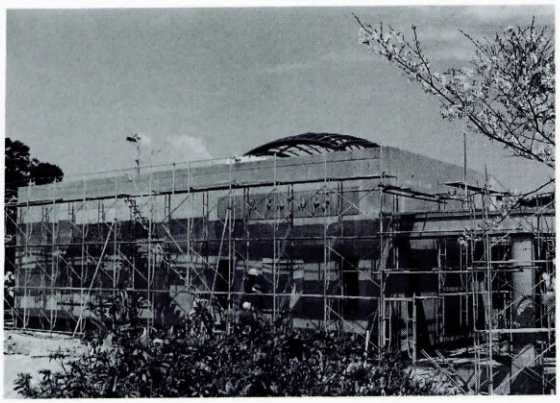
二十余年経った現在も私から離れないもの、私に「シベリヤ」を描かせているもの、又描くことの不可能なものを……。

だから『私のシベリヤ』。

一九七〇　一、九

香月泰男

次回からは、作品等を通じて、画家の人柄やその時々の画家の考えなどを掲載してみたいと思います。



**建設が進む町立香月美術館**

# 町民文芸

## 俳句

### 清風句会

（四　月）（五十音順）

行く春を止め置きたく春の夢　上利はな女

日は没りて黄昏長し春惜しむ　因藤　兎史

信号機おりてもくぐる絞白蝶　上田　雪子

惜春や窓開け峡に琴響く　岩本さつき

やすらかな納采盛儀春日射す　斉藤　元

一顆だにおろそかならず袋かけ　高崎はま子

一舟の遠く夕凪ぎ春惜しむ　田村　九重

根付きなし八十八夜境とや　藤沢　忘帰

春惜しむ次の人世も惜しむかな　松田　妙子

手に残こる香る楽しむ山菜採り　松浦　嘉子

春雷や天にとどろき雨の朝　松永　保代

九谷展風の誘いし花の客　宮垣　蔦女

選者追吟

独り言猫が聞いている春の縁　冨田佳津美

## 短歌

### 三隅短歌会

（順不同）

もろもろの草木おのおの花つけて言葉をもたぬそのいじらしさ　平川　育子

桜咲く四月朔日吹く南風の黄砂に沈む沖の島々　石村　栄助

寮住い今日で六日目別れ際背を向けながら両手上げし子　立間　雅子

兵たりし日愛馬「サキ号」に救われし今ある命語りつぐ老夫　古屋　博子

「じゃあまたね」と言ひつつ手を振り帰りゆく笑まふ目もとの亡夫に似し娘よ　岡　松子

長登りの枝垂れ桜は咲き充ちてしばし佇む通院の途に　田中　朝子

しきつめし草ひきおればうぐいすの鳴き声しきり山畑わたる　臼井　麻子

温くもりをむさぼる朝日曜の目覚めの床に鳥の声聞く　吉村　恵子